様式Ｃ-7-2

自己評価報告書

平成　２３年　４月　３０日現在

機関番号：３２６１６
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2008～2011
課題番号：２０７２０１３５
研究課題名（和文）中国語を母語とする日本語学習者による長母音の産出傾向と母音の範疇知覚化
研究課題名（英文）Production Patterns in Japanese Long Vowels and Categorical Perception of Vowel Length by Chinese-Speaking Learners of Japanese
研究代表者
栗原　通世（KURIHARA MICHIYO）
国士舘大学・21 世紀アジア学部・講師
研究者番号：４０４３１４８１

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・日本語教育
キーワード：日本語音声習得、中国語母語話者、長母音、範疇知覚、日本語教育

１．研究計画の概要

(1)本研究課題の目的

中国語を母語とする日本語学習者の長母音習得過程を知覚と産出の両面から明らかにすることが本研究課題の目的である。同じモーラ数でも音節構造が異なる場合の長母音の習得状況を検討し、学習者の習得の実態に現状よりも合致した音声教育プログラムを考案することを目指している。

(2)本研究課題の内容

母語に関わらず日本語学習者の母音の長短の混同が知覚・産出両面で観察されており、中国語母語話者も例外ではない。この現象は語の知識不足に起因するという考えもあるが、学習者に内在する母音の長短の知覚カテゴリーが不明確であることや、知覚カテゴリーに対応するよう母音の長さを制御して発話することが難しいという、より深いレベルの問題とも関係があると思われる。したがって、学習者に見られる母音の長短混同に関しては、知覚能力と産出能力との関連性を検討する必要があるが、両能力を同時に扱った研究は管見の限り多くはない。さらに、これまでの研究では、調査語の環境が限られていることもあり、学習者が日本語長母音を習得していく過程には、未だ不明な点が多い。そこで、本研究では以下の３点について検討を行っている。

①語の音節構造が長母音産出に与える影響

４モーラ語で長母音が含まれる様々な音節構造の語の発話傾向を鹿島・橋本（2000）に基づく日本語のリズム単位により分析し、音節構造が中国語母語話者の日本語発話に与える影響を検討する。

②語の音節構造が母音の範疇知覚に与える影響

①と同様の語を利用して、一語中の長母音の長さを様々に変えた複数の刺激語を作成し、中国語を母語とする話者に対する知覚実験を行う。得られた結果より、母音の長短判断に関連が深いとされる範疇知覚の程度を分析する。

③長母音産出と母音の範疇知覚化との関連性

長母音の産出傾向と母音の長短の範疇知覚の程度を照らし合わせ、中国語母語話者における母音長の知覚能力と産出能力との関係を考察する。

２．研究の進捗状況

①産出傾向について

長母音を含む語の産出傾向分析のため、「たーたた」「たーたー」「たーたん」「たたたー」「たんたー」「たったー」「たたーた」と比較対照である「たたたた」の計８語の発話データの収集を行った。長母音を含む音節が一語に占める割合を語ごとに求め、中国語母語話者のうち、日本での滞在期間が４ヶ月程の滞在歴が短い学習者群（６名）と平均で 41 ヶ月滞在しており滞日期間が長い学習者群（９名）の結果を日本語母語話者（６名）と比較した。Kruskal Wallis の H 検定とその後の Bonferroni の不等式による多重比較の結果より、「たーたー」と「たんたー」で、滞在歴の短い群と日本語母語話者との間で異なる傾向が見られた（$p<.05$）。「たーたー」の長母音を含む前部の音節は日本語母語話者の方が長く発し、後部の音節は滞在歴が短

い学習者の方が長く発していた。また、「たんたー」についても長母音を含む音節は、滞在歴の短い学習者群の方が日本語母語話者よりも長く発していることが分かった。なお、滞在歴が長い群と日本語母語話者には類似の発話傾向が観察された。

②知覚傾向について
　東京方言母語話者が読み上げた「たたたー」「たんたー」「たったー」「たーたー」を原音声とし、各語の語末位置の長母音が様々な長さになるように加工した刺激音を用い、極限法による知覚実験を実施した。各語の語末位置の母音が徐々に長くなるように並べた上昇系列と、順に短くなるように配置した下降系列を各語各４回呈示した。被験者には、母音の長さが変わったと思った時点でコンピュータのキーボード上の定められたキーを押すよう指示を出した。中国語母語話者 25 名分のデータを収集したが、各系列で最初に提示した音声に関して母音の長短が判断できなかったり、最初から最後まで母音長の変化を全く感じられなかったりした被験者が多数いた。このことから、本研究を遂行する上では、極限法によるデータ収集は不適切であることが分かり、知覚実験の手法の再考を余儀なくさせられている。

３．現在までの達成度
　②やや遅れている
（理由）知覚実験を極限法によって実施したが、正確なデータ収集には至らなかった。そのため、再度、知覚実験を立案し実施しなければならない状況にある。このような理由で、当初の計画よりも研究進度に遅れが生じている。

４．今後の研究の推進方策
　知覚データの収集については、当初、計画していた極限法ではなく、恒常法などの知覚実験に切りかえる。被験者には、母音の長短を強制的に二者択一式に判断してもらう実験を今年度は実施していく。既に収集した産出データを参考に、知覚実験の刺激音声は「たーたー」と「たんたー」に絞り、産出データとの照合を行っていく。

５．　代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
① 栗原通世（2011）「中国語北方方言母語話者による４モーラ語の発話に見られる音節構造の影響」『21 世紀アジア学会紀要』第９号，国士舘大学 21 世紀アジア学会，査読無，（印刷中）.

〔学会発表〕（計２件）
① 栗原通世（2009）「日本語学習者による長母音の聴き取りと発音の傾向」，第 24 回グローバルアジア研究会，2009 年 7 月 16 日，国士舘大学（東京都町田市）.
② 栗原通世（2010）「中国語北方方言母語話者の長音産出における音節構造の影響」，第 21 回第２言語習得研究会全国大会，2010 年 12 月 19 日，麗澤大学（千葉県柏市）.